

吉川幸次郎と翻訳空間

京都大学人間・環境学研究科／The Baker Street Bakery

大久保友博／大久保ゆう

◇クリエイティブコモンズ



表示 - 非営利 - 改変禁止 2.1 日本

あなたは以下の条件に従う場合に限り、自由に

*本作品を複製、頒布、展示、実演することができます。

あなたの従うべき条件は以下の通りです。

*あなたは原作者のクレジットを表示しなければなりません。

*あなたはこの作品を営利目的で利用してはなりません。

*あなたはこの作品を改変、変形または加工してはなりません。

(<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/2.1/jp/>)

執筆：2006年1月

(学位論文「翻訳研究序論——空白の強度と翻訳者の現象学」より抜粋)

PDF ファイル制作：2009年1月19日

発行：2009年1月19日

ホームページ：<http://www.alz.jp/221b/>

翻訳空間とは、翻訳している空間のことではないし、翻訳者のいる場所でもない。人が翻訳を行う際、起点言語と目標言語の範囲を措定し、そのお互いを異化するために、本来あるはずの中間的な言語を消去し、何もなくなってしまうことを言う。あるいは、その消去によってできた言語と言語の間の空白、異化のための余白作用とも言える。その余白がなければ翻訳はできない。目標テキストがどこに訳出されればよいかははっきりしないからだ。空間がなければ言葉は中間地帯にぽろぽろとこぼれ落ちていく。そこは何ものも侵入できない空白でなければならない。野村喜和夫の言うように、翻訳空間はポリフォニーともクレオールとも直接的な関係がない。ただ、翻訳者の頭の中では真っ白なのである（野村 1996）。翻訳者によって作られた、がらんどうの何もない地帯。何も入れない場所。

言語の措定によって翻訳空間が規定されるとすれば、また翻訳空間も言語を措定する。ある措定によって生まれた空白が効果あるものとして社会に認められたとき、後に続く者は措定を意識せず、ただ空白だけを繰り返すことがしばしばある。その空白によって措定が自動的に規定されるので、翻訳者はさほど意識せず無批判に適用すればよい。なぜならばそれが有効なのだから。しかしそれが何度も使われたために伝統として固化してしまうと、ある時代に生きる人間の現実や意図と折り合わなくなることがある。有効でなくなったにもかかわらず、伝統として固化した翻訳空間が繰り返されてしまう。そのとき、空白は翻訳者にとって威圧的にもなるだろうし、何か強制されるものとして存在することもあるかもしれない。もちろん、いついかなるときであれ、翻訳者はある程度、自分の翻訳空間に政治的境界や政治的言語措定の影響を受けているのではあるが¹。

翻訳空間には、大きく分けて、ふたつの傾向がある。それは環境に起因するものと、意識的に操るものである。環境をもととして作られる翻訳空間は、ある人間／文化とある人間／文化が、どれだけ接触・交流しているか、どれだけ親密性があるか、といったようなことが重要になってくる。砂漠の民と氷河の民のあいだでは、お互いに接する現実が違うために、知識がなければ、なかな

か相手の思うことを身体化できないような状態を思い浮かべてほしい。また、その用いる言語の構造的な差異も、この環境的要素のひとつである。膠着語と孤立語との差や、表現構造の差、用いられる単語の差など、様々である。もし言語を距離的に考えるとすれば、この環境の問題は遠／近としてとらえられるだろう。

一方、意識的な翻訳空間の場合は、翻訳者本人が、対象を自分と異なるものであるのか、それとも似ているものであるのか、どう考えているのかという自覚が大きく関わってくる。それは実際に交流のない未知の人々と接触したときだけではなく、同じ文化に属する隣人の場合でも同様である。砂漠の民が氷河の民も同じ人間であると考えることと、氷河の民の仲間同士でもお互いを異なるものとして考えることがあるように。この意識的要素を同じように比喻すれば、硬／軟としてもいいだろう。

このふたつの要素によって作られる異化の程度を、翻訳空間の〈強度〉とする。ここで翻訳空間は、翻訳者に措定したふたつの言語が異なると感じれば感じるほど、翻訳空間の強度が高くなり、反対に感覚が薄ければ薄いほど、強度は低くなる。後者の薄い感覚というのは、人間が普段の生活をする中で、何気なく人と会話している状態に近い。

翻訳にとって〈翻訳空間の強度〉は大きな問題である。翻訳空間が強いと、それだけクワインやデイヴィッドソンが〈根本的翻訳〉あるいは〈根本的解釈〉といった状態に近づく。ふたりが〈根本的〉というのは、ふたりの人間がお互いの言語や文化をまったく知らず、相手の思想だけでなく相手そのものもどんな人間かまったくわからない状況のことである。その場合、どうやって意思疎通を図っていくかというと、ふたりが生活をともにし、共通部分を捜していく中で、ある一方の言語行為を、同じ文脈の中で自分の言語行為に重ね合わせ、推量していくといった方法が用いられる。このとき、翻訳／解釈するものには、自分の身体や人生すべてを使って解釈することが要求されるであろう。それゆえに、強い翻訳空間は、高い身体性を要求する。

身体性への求めが高いということは、翻訳者にとって多くのエネルギーを必要とし、かなり重い負担となる。それは翻訳行為そのものの継続や完了といっ

たことに対して、大きな影響を与えることは間違いない。ただし、その求めが強いにもかかわらず、うまく身体化することができれば、翻訳者は自分の思うところへ言葉を表出することができる。ただし、その必要なエネルギーの高さゆえ、誤差も大きくなる。いかなる表現体で、いかなる思想を表象するか、その精密度が細かければ細かいほど、それもまた必要な身体性を加算することとなるが、ある人間とある人間との翻訳の成功は、畢竟、程度の問題なのかもしれない。

逆に翻訳空間が弱いとなると、もちろん必要とされる身体性は低くなっていく。そうすると理解は機械的、あるいは画一的となり、細かな差異にまで反応できなくなるが、ある人間／文化同士にあらかじめ類似性があり、同一性がいくぶん保証されていれば、それで事足りる。しかし、意識してどこかへ、誰かへ、と言語の表出をある一定の表現体に向けにくい。そのため、表出がずれた場合は、受け取る相手が言語を解釈するために、補正をかけて推量しなければならないため、そのぶん強い身体性を要求することになる。弱ければ弱いほど、およそコミュニケーションには不適な状態に近づいていくが、相手に対してその言語や行為が〈異〉なるものであるという衝撃を与えられるようになる。

これら翻訳空間の状態は、あるときには翻訳者にとって戦略的なものであり、あるときには固化しているがために強制されることもある。本質的に、どの翻訳空間がよく、どの翻訳空間が悪いということもない。人間は毎日、高いエネルギーを要求され続けては、生きていくこともままならぬであろうし、また弱い翻訳空間では、うまく生活が送れている場合はよいが、たまに意思疎通、会話に支障をきたすことがあり、それが大きな問題に発展することもある。

翻訳空間の問題は、ある状況・事情に照らさなければならないが、これらの問題を非常にわかりやすい形で提出している人物が、昭和の初め頃に存在する。それが若き日の吉川幸次郎であり、のちに中国文学研究の世界的研究者となったその人である。

吉川幸次郎は、昭和13（1938）年10月、34歳のときに「小野勝年氏訳注「歴代名画記」」という文章で翻訳を問題にして以来、3年の間に多くの翻訳論と、その論に基づいた翻訳を世に出している。吉川がなぜ翻訳論を書き、みずから

翻訳を行うに至ったかを考えるには、まず当時の中国文学翻訳の状況をふまえておかなければいけない。

昭和10年前後の中国古典の翻訳は、だいたいがいわゆる〈漢文書き下し文〉であった。たとえば岩波文庫で、その時期発刊された中国古典の翻訳とされているものを挙げてみると、昭和11年発行の『傳習録』では、

先生は大学の格物^{かくぶつ}の諸説に於て、悉く旧本を以て正と為す。蓋し先儒の所謂誤本なる者なり。愛始て聞きて駭^{おどろ}き、既にして疑ひ、已にして精を殫^{つく}し思を竭^{つく}し、参互錯綜^{さんごさくそう}して以て先生に質^{たゞ}し、然る後に先生の説は、水の寒きが若く、火の熱きが若く、断断乎として、百世以て聖人を俟^まちて惑^{まど}はざるものなるを知る。(山田 1936: 15: 旧字を新字に改める)

であり、また当該の『歴代名画記』(昭和13年)では、

夫れ〔絵〕画は教化を成し、人倫を助け、神変^{きは}を窮め、幽微^{はか}を測り、六籍〔六経〕と功を同じくし、四時と運〔用〕を並ぶ。〔これ〕天然に発するなり、述作に由るには非ず。古聖・先王〔天の〕命を受け、〔図〕籙に応ずれば則ち亀字は靈を効し、竜図は宝^{しめ}を呈す。(小野 1938: 11: 旧字を新字に改める)

であった²。もちろんすべてがすべてこのようなものではなく、当時コンテンプラリーな中国文学の翻訳、魯迅や郭沫若といった作家の翻訳は、言文一致的な訳文であった。しかし依然として古典においては〈漢文書き下し文〉が翻訳とされていたのであって、それに対する異議申し立てが、吉川幸次郎の翻訳論であり、翻訳であった。

その一連の翻訳論の中でも、吉川の態度をもっともよく表しているのが、昭和15(1940)年に出された「支那語の不幸」そしてその翌年5月に竹内好への反論として書かれた「翻訳論の問題」である。その要点はみつあり、ひとつは〈同文〉思想への、もうひとつは〈訓読〉という構造への批判である。

「同文」ということは、同じ文字を使用しているということである。同じ言葉だという事ではない。しかるに、支那語は「同文」であるが為に、国語と同じ言葉、——とまではゆかなくとも、大して変りのない言葉のように、考えられ勝ちである。(吉川 1969a: 422)

この吉川の〈同文〉に対する意義は、そのまま翻訳空間の〈意識〉の問題に関わってくる。もちろん中国と日本は隣あっていて、古くから交流が盛んであり、日本には中国文化起源のものが多くある。その中でも漢字はもっとも接することの多い、中国起源のものであり、それゆえに、日本語における漢字と中国語における漢字を似たようなものと思ってもふつうのことである。つまり、環境から見て、実質、近しいところがあるのであり、それゆえに、人々の意識は〈近い〉あるいは〈同じだ〉と思ってしまう。それが〈同文〉という言葉の表すところである。

しかし、さきほど述べたように、近ければ近いほど、微妙な違いに気がつかない。微妙であり、なおかつ果てしないほどの違いがわからない。そこで吉川は、あえて「これは錯覚である」(吉川 1969a: 422)と言い放つ。中国語と日本語は似ていても、非なるものである、と。

まずその理由として、吉川は語順を挙げ、その次に、同じ漢字であっても、中国と日本では意味が違うということを説明する。中国語の〈親切〉と日本語の〈親切〉、〈猛然〉と〈猛然〉という二字の熟語の差異にはじまり、〈看書〉という中国語を、日本語の漢字感覚に従って〈本を見る〉としてしまう現象などを挙げる。

同じと考えることによって低くなった翻訳空間のため、自己の中で言葉を身体化することがなく、機械的に置き換えてしまうことを、吉川は非難している。もちろん、吉川は同じ漢字が扱えることによる、意思疎通へのある程度の便利さをも否定しているのではない。ただ同じと考えることによって、より深い理解への阻害となっていることを〈不幸〉であると嘆くのである。

そして今ひとつは〈訓読〉への批判である。吉川の訓読への批判点は以下の

ようにまとめられる。

- (1) 言葉が古すぎて、現代人には正確に意味を把握しづらい。
- (2) 訓読の言葉が画一的で、何でもひとつの言葉を当てるため、意味の変遷や単純化によって、理解の妨げになっている。
- (3) 漢字をそのまま残すことによって、意味の違いを認識できず、誤読してしまう。

このみっつの指摘を極端にまとめてしまうならば、訓読という表現体が、当時の日本にとって古いものになってしまった、ということである。訓読にあてる訓も古ければ、そこに残す漢字も、昔と今では意味が異なっている。また以前は包括的な意味を持っていたのかもしれないが、時代を経て変化したり、狭くなったりする。それは日本語においての訓が時代を経て意味が変わるように、中国語においても秦の時代のある漢字と、宋の時代のある漢字の意味はまったく違うであろう。つまり、翻訳空間における目標言語の措定が、訓読という技術が作られた当時は合っていたかもしれないが、時代を経て、完全に、また二重にずれてしまっているということだ。そして同じく起点言語についても、〈同文〉という思想からは、措定がゆるいと言わざるを得ない。そしてそれが無批判に継続され、そこで繰り返される空白の枠は現状と大きく外れてしまっている。翻訳空間の固化がそこにある。

そのような訓読は、もはや〈翻訳〉ではない、というのである。吉川にとって、翻訳とは専門家による原典の注釈であると同時に、原典を読み得ない人のためのものであった。江戸時代なら漢文の素養のある人も少なからずいて、訓読書き下し文や訓点をつけた文でも翻訳として通用したであろうが、昭和も10年も過ぎる頃に至っては、西洋からの影響も強くなって漢文が教養となる時代も終わり、文章も口語化するようになった。もはや訓読文では、中国を専門とするものにしかわからないようになっている。吉川は、そのような時代において、訓読文ではなく「もっとやさしい国語〔中略〕に訳してはいけないのだろうか」（吉川 1969b: 501）という素朴な疑問を持つに至った。日本と中国が

お互いに理解するためには、その方がよいのではないかと。

この種の疑問を抱いたのは、何も若き吉川幸次郎ひとりだけではない³。同時期の昭和12（1937）年、吉川よりも二歳上の中野重治が『俳句研究』という雑誌の12月号に「漢詩・漢文の翻訳」という一文を寄せている。この文において中野は、トルストイは日本語をとおして読めるが、『論語』や杜少陵は日本語をとおしては読めないという。そして吉川よりも、もっと具体的な表現でもって、ずれを説明している。

私の問題は日本翻訳の問題だ。前にも言つたが、漢文学はヨーロッパ文学が日本訳を持った意味では日本訳を持たなかつたのだ。〔中略〕しかしとにかく日本は、それは第十八、十九世紀の世界史の反映でもあつたが、ヨーロッパ文学の日本訳は持ちえたのにたいして、古いのも新しいのも、支那文学の今日の意味での日本訳は終に持たなかつたのだ。（中野重 1998a: 271）

このように述べ、中野は、日本と中国とは同文の国という幻想を捨てなければ、翻訳は無理である、というふうにつづける。ここで重要なのは、「ヨーロッパ文学が日本訳を持った意味では日本訳を持たない」というところである。つまり、ここでは中国語の翻訳とされるものと、ヨーロッパ文学の翻訳とされるものが対比されている。中国語の翻訳は漢文書き下し文であるが、ヨーロッパ文学の翻訳は、言文一致による口語的文章体である。前者は専門的だが、後者は一般大衆のわかる文体とされている。読書家であった吉川も、中学時代に坪内逍遙のシェイクスピアを読んだという。岩波文庫がまだなかった学生時代とはいえ、おそらく他の翻訳書もいくらか読んだであろう。ヨーロッパ文学の翻訳がとった文章の形を、知っていたに違いない。ヨーロッパ文学の翻訳空間と、中国文学の翻訳空間のずれが、吉川をして訓読文を〈翻訳〉ではない、と言わしめた一因である。

では、その批判の対象とされた〈訓読文〉は、いったい何だったのか。〈翻訳〉でないにもかかわらず、保持されてきた訓読という技術は、何なのか。吉

川は訓読は翻訳ではないとしたが、必ずしも訓読を排しているわけではない。

古田島洋介によれば、当時、漢文訓読は〈記憶術〉であったという。漢文の簡潔さや決まった訓読が当てられるという事実も、どれも暗記する便利のためである。もちろん当初は翻訳として始まったわけだが、すでに江戸時代には記憶術となっており、その訓読から思い出される中国語の原文を思い浮かべながら、意味を考えるということであったらしい（古田島 1997）。それで有効であった背景には、学習というものの性質の違いがあっただろう。古くの学習法は〈暗記〉であったが、当時の多くの人々にとっては、そうではなかっただろう。また、この訓読は中国語の一種の分析法としても効果があり、それゆえ専門家にとっては容易には捨てられぬ方法であった（古田島 2000）。

ただ、それが翻訳であるかどうかというのは、また別の話である。古田島の考えでは、漢文訓読を欠陥だとするとき、おおよそみつつの立場が現れてくるという。ひとつには、訓読を無用とする一派である。だが訓読は専門家にとって有用な解析の道具なので、この論は素人や局外者より提出される。ふたつには、漢文を訓読ではなく、現代中国語で音読せよという一派である。みつつめは、訓読を改良して現代風の訓読を作ろうとする一派である（古田島 1999）。

では、吉川はこのどこかに当てはまるのだろうか。確かに学習の面においては、吉川はのち現代中国語での学習を提唱しているが、それは翻訳という面からではない。みつつめの訓読を改良しよう、という立場に一見近いように見えるし、本人も〈一種の訓読〉というようなことを発言しているものの（吉川 1969e）、それはあくまでも比喩的な表現である。訓読の訓読たるゆえんは、原文の漢字が残存していること、パターンに当てはめられること、というふたつがなければならない。吉川の主張では、画一的な訳も、原文の漢字を残すことも、ともに排されている。なぜなれば、「支那語がもっているだけの観念を、なるだけ附加物を加えずに、またなるだけ省略せずに、そのまま日本語に移そう」（吉川 1969e: 517）というのが彼の真意だからである。訓読においては、詞（名詞・動詞・形容詞）だけが特権的にそのまま漢字として残り、辞（助詞・助動詞）だけが日本語化されるという構造が翻訳とされる。なぜその形式から解き放ってはいけないのか、吉川は納得いかなかった。その唯一性、硬直性

が中国という存在を遠ざけていることに、我慢ならなかったのである。

吉川は昭和12（1937）年当時、京都にある東方文化研究所で同僚の研究者たちとともに、『尚書正義』の定本づくりをしていた。そこでは研究者たちが集まり、原文を音読してのち、口語に訳し、それから底本の異同を検証する、というものであった。そこでは何も漢文で議論するわけではなく、日本語で精密な意味や語を話さなければならないのだから、いきおいこなれた日本語へと迫っていっただろう。それと時期を同じくして、吉川に清朝時代の方観承が書いた『棉花図』という綿栽培の指南書を訳してほしいという依頼を受ける。後者は吉川にとって初めての出版翻訳であり、しかも文学ではなく実用のための翻訳であった。むろん読む人、綿花の栽培をする人は漢文の素養があるとは限らない。そのため、内容を伝えるためには口語にならざるをえない。吉川はその訳稿を出張先の北京にまで持っていき、綿花栽培に詳しい現地の友人に相談しながら訳文を手直しもしている。そのような研究所および出版での翻訳経験を経たのち、中国文学翻訳に対する疑問として、「小野勝年氏訳注「歴代名画記」」が出された。自分の翻訳はあれで本当に良かったのだろうか、という自問や反省の意味もあるだろう。この昭和13年の暮れ、吉川が新しい古典翻訳の形を世に問おうと、『尚書正義』の翻訳出版を決意したことは、偶然ではない。

もう一つ翻訳について述べたいことは、この翻訳は私共が企図する支那文献の新しい翻訳法を示すものである。私共は旧来の「漢文訓読法」に不満をもつものであって、それはわれわれの祖先の努力の集積ではあろうけれども、現在のわれわれがそれに執着をもつ必要はないと考える。

（吉川 1970a: 18）

昭和15（1940）年2月に岩波文庫から翻訳『尚書正義』第一冊を出版したのち、吉川は精力的に翻訳および翻訳論を世に出していく。翌月に胡適『四十自述』と豊子愷『縁々堂随筆』という同時代の本の翻訳、そして翻訳論「支那語の翻訳」。9月に「支那語の不幸」、10月には『尚書正義』の第二冊があつて、翌年1月には「支那語とその翻訳」、5月には翻訳批評に対しての反論として「翻

訳論の問題」を出し、11月には『尚書正義』第三冊、それと平行して9月から12月にかけて「翻訳時評」という翻訳論を書いている。

この時期は、日本と中国とのあいだで戦争が始まり、次第に激しくなっていた最中である。昭和12（1937）年に日中戦争が始まってからというもの、中国に対する印象はどんどん悪くなっていく。その中、彼に翻訳をさせる原動力となったのは、何だろうか。それこそ、彼が現行の翻訳に対して提出した批判のみつつめとなるものだ。

それは、日本人が中国に対して、中国人に対して、いや人間に対して、冷たいということである。人の心をぞんざいにしているということである。それゆえに、翻訳がひどく、わからないものになるという。吉川が「文学の翻訳に於いて、最も重んぜらるべきもの、それは作者の心理をおいて、ほかにない筈である」（吉川 1969f: 539）というとき、そこには中国への冷淡さを、静かに怒る吉川がいる。中国語には文法などない、中国人のいうことなどどうせわからない、と、中国語を教える立場のものからさえも聞かれる。そんな態度で、中国の何がわかろうか。人の何がわかろうか。吉川は、そこまで一般化して考える。

ドナルド・デイヴィッドソンは、誰かを解釈する際には、少なからず相手に好意を持たなければならないという、好意の原理を背景に、根本的解釈をとらえた。吉川は、その好意の原理を最大限に適用しようとする。中国のことを研究するなら、中国人になりきろうとする。吉川が中国留学から帰国したのち、長袍という中国服を着て毎日を過ごしたことは有名である。それは日中戦争の最中とて変わることはなかった。大学という公の場でも、中国服に身を包み、学生を前にして堂々と中国への愛情を語る。小学生のとき、顔が中国人と似ていたことから、「シナジン、シナジン」とはやしたてられ、「中国人と似ていて何が悪いのか」と感じたという。吉川は中国人になりきることを恥じない。かといって、自分が日本人であるということを捨てるのではない。両方における吉川の措定は、かなり厳密になされる。単に中国語と漠然と考えるのではなく、『尚書正義』であれば、「七世紀人の言語と思考、また言語表現の方法、思考の方法」（吉川 1970c: 505）に迫ろうとする。「漢なら漢、魏晉なら魏晉、唐

なら唐、元なら元」の雰囲気、言語がある。そのそれぞれの細かなものがあるからこそ、双方の遠さがわかる。吉川の観る各時代の中国と、その人々。そして当時の日本の一般の人々。現状に果てしのない遠さを感じた吉川の強い翻訳空間は、吉川本人を翻訳へと導く。

吉川が「人間の心を把握していない学問、それが何の役に立つだろうか」（吉川 1969j: 183）と述べるとき、「おれならばどうするであろうか」（吉川 1970f: 65）と考えるとき、彼の中で好意の原理が働く。自分を対象に近づけて、理解しようとする。彼が「中国の文学を貫くもの、それは人間への信頼」（吉川 1969i: 463）と発言するとき、それは同時に彼自身の哲学の表明ともなる。

吉川は論文は漢文で書いたが、同時に戦後、多くの本を一般向けに書いた。あくまでもわかりやすく、あくまでも面白く美しく。それによって、離れかけていた中国への興味が、再び生き返ったことは言うまでもない。友人の桑原武夫は吉川を評し、「大廈の倒れんとするをひとりよく支えた名木」（桑原 1982: 249）といった。そして教え子の竹内実は、吉川の死後、「先生は中国という存在を、できるかぎり日本の人びとに近づけることを念願しておられたのだとおもう」（竹内 1982: 152）と回想する。若き日の翻訳に邁進する吉川幸次郎に、その後、中国文学へ人々を近づけようとした吉川幸次郎の原型があるだろう。

吉川が胡適『四十自述』の翻訳を出したとき、竹内好はその吉川の考え方ややり方を〈低俗〉と評した。確かに『四十自述』も『縁々堂随筆』もすぐれた文学作品とはいいがたい。もちろん吉川も「講談師よりも詩人を」、「牧師よりも哲学者」を尊敬する。だが尊敬に値する詩人、哲学者はあまりにも少ない。悲しいかな、それが事実である。しかし、そのとき、吉川はかえって牧師や講談師を信頼すべきものを感じるという。それゆえにいつそう『四十自述』や『縁々堂随筆』に人間としての真実を感じるとして、竹内への手紙の最後をこうしめくくる。

また日本語の問題にしましても、小生は「複雑怪奇」というような言葉使いよりも、むしろ「けったいな」という言葉の方に、より多くの好意を寄せるものであります。そもそも小生が支那の事象に興味を感ずるの

も、また正にこの態度にほかならぬといえます。小生の愛するものは、あなたのおっしゃる「素朴な言葉で談られた人間行為の記録」なのであり、「錯雑とした心理の虚影」ではないのであります。低俗と評せられることは、小生としてもあまり愉快なことではありません。しかし高遠と評せられるよりは、ましであります。高遠な思想や文章こそ、大抵は小生の嫌悪するものでありますから。三十日夜。(吉川 1969e: 519)

そして、吉川が残した『尚書正義』『四十自述』『縁々堂随筆』の翻訳の出だし部分は、次の通りである。

「尚書序」。正義。道は本来は空寂なものであって、名というものがあるわけではないが、やがて形が道から生じ、物が名によって指し示されることとなると、もろもろの経史は、物に基づいて名を設けることとなった。物には本来の形があり、形は事によって表わされるが、聖賢が教えを明らかにする際には、事は言葉として表われる。(吉川 1970b: 28)

^{タイツホイ}太子会はわれわれの田舎では秋の一ばん賑やかなお祭りである。しかしその年の太子会は、あまたの人人を失望させた。(吉川 1970d: 332-333)

むかし聞いた誰かの説に、中国人は誰でも三つの博士の資格をそなえているという。箸を持つ博士、^{ひなわがみ}煤頭紙を吹く博士、西瓜の種を食う博士。
(吉川 1970e: 444)

それまでの翻訳との差は一目瞭然である。固化した翻訳空間は、こうして溶かされる。

注釈

¹ 翻訳空間と政治の関連で問題になるのは、翻訳空間の強制という事態だろう。ある国家や政府が、目標言語側の措定をある一定の範囲に限定してしまい、翻訳者はそれを守ることが義務づけられたり、それだけを学べと押しつけられたりする。あるいは、国家の言語学習の統制の一部として、方言に訳すことが禁じられたり、実際に現地で使われている言葉に訳せないという事態も考えられようし、また、目標言語側の措定が支配者層の言語に限られるということもあろう。この項との関係では、〈訓読書き下し〉という硬直した翻訳空間の上で、学問的権威と政治性から、多くの人はその空間を疑問なく受け入れていたが、若年層がその空間のズレを敏感に気づき、空間を破壊しようとしたという構図で見ることにもできる。他に、香港において大学で翻訳空間が政治的に強制されている例として、劉健芝〔ほか〕の「翻訳の政治性とアカウンタビリティ」（2000）が一読に値する。

² 当時の翻訳事情をうかがうためには、その時期に出版された、中国語からの翻訳書をすべて調査するのが正しいだろうが、ここでは簡略的に、昭和13年前後の岩波文庫から出版された中国語からの翻訳書を見るにとどめる。ここでは年ごとに分け、まず発行月日、訳者名（あれば著者名）、書名、原著の刊行された時代区分（当該書の記述による）、目標テキストの表現体、起点テキストの収録状況、という順に記す。起点テキストの収録状況に、併記とあるのは、起点テキストと目標テキストがページごと、一文ごと、段落ごとのように、並んで収録されている場合をいい、別録というのは、目標テキストが訳文としてまとめて先に掲げられ、そののち起点テキストだけが別に入れられている、といった状態のことである。なお、出版データは（岩波文庫編集部 1997）によった。

[表2-1] 岩波文庫1933-1940における中国古典の翻訳表現体

1933（昭和8）年 4. 15、幸田露伴 [校閲] 漆山又四郎 [訳註]、『訳註 李太白詩選 下巻』、唐、訓読書下、併記。 4. 30、武内義雄 [訳註]、『論語』、漢？、訓読書下、併記。 10. 5、藤原正 [校訳]、『孔子家語』、不明、不明、不明。
1934（昭和9）年 3. 5、曾我部静雄 [訳註]、『塩鉄論』、前漢、訓読書下、併記。 6. 16、山口察常 [訳註]、『菜根譚』、明、訓読書下、別録。 10. 15、太田悌蔵 [訳註]、『寒山詩』、唐、訓読書下、併記。
1935（昭和10）年 4. 30、藤原正 [訳註]、『子思子』、梁代以前、訓読書下、併記。 6. 15、佐藤春夫・増田渉 [訳]、『魯迅選集』、近代、口語文、訳文のみ。 7. 30、朝比奈宗源 [訳註]、『臨濟録』、唐、訓読書下、併記。 11. 15、橋本循 [訳註]、『訳註 楚辞』、楚、訓読書下、併記（文語による評釈あり）。 11. 30、山田準・阿多俊介 [訳註]、『孫子』、周？、訓読書下、併記（口語による評釈あり）。
1936（昭和11）年 6. 15、宇井伯寿 [訳註]、『大乘起信論』、梁、訓読書下、併記。 6. 30、武内義雄・小林勝人 [訳註]、『孟子』、？、訓読書下、併記。 9. 30、山田準・鈴木直治 [訳註]、『伝習録』、明、訓読書下、別録。 10. 15、宇井伯寿 [訳註]、『黄檗断際禅师 伝心法要』、唐、訓読書下、併記。 11. 15、得能文 [訳註]、『仏説四十二章経・仏遺教経』、漢、訓読書下、併

記。
1937（昭和12）年 4. 30、高田真治〔訳註〕、『易経』、？、訓読書下、併記（注で全文を敷衍説明）。 7. 15、朝比奈宗源〔訳註〕、『碧巖録 上』、宋、訓読書下、併記。 9. 15、司馬遷〔著〕藤原正〔訳註〕、『孔子伝 附 弟子列伝・集語』、前漢、訓読書下、訳文のみ。 10. 5、朝比奈宗源〔訳註〕、『碧巖録 下』、宋、訓読書下、併記。 12. 15、山田準・安本健吉〔註解〕、『評釈 千字文』、梁、文語文、訳文のみ。
1938（昭和13）年 2. 25、張彦遠〔撰〕小野勝年〔訳註〕、『歴代名画記』、唐、訓読書下、別録。 3. 10、武内義雄〔訳註〕、『老子』、？、訓読書下、併記。 4. 5、西晋一郎・小糸夏次郎〔訳註〕、『太極図説・通書・西銘・正蒙』、宋訓読書下、併記。 7. 1、慧海禅師〔撰〕宇井伯寿〔訳註〕、『頓悟要門』、？、訓読書下、併記 9. 15、沈復〔作〕佐藤春夫・松枝茂夫〔訳〕、『浮生六記』、清、口語文、訳文のみ。
1939（昭和14）年 1. 23、圭峯宗密〔撰述〕宇井伯寿〔訳註〕、『禅源諸詮集都序』、唐、訓読書下、併記。
1940（昭和15）年 1. 23、秋月胤継〔訳註〕、『近思録』、南宋、訓読書下、併記。 3. 5、曹雪芹〔作〕松枝茂夫〔訳〕、『紅樓夢（一）』、清、口語文、訳文の

み。

7. 2、武内義雄・坂本良太郎 [訳註]、『孝経・曾子』、?、訓読書下、併記

10. 26、曹雪芹 [作] 松枝茂夫 [訳]、『紅樓夢 (二)』、清、口語文、訳文のみ。

³ 他にも、1929（昭和2）年に刊行された佐藤春夫 [訳]『車塵集』が先駆的な試みとして注目できる。これは平易な散文訳であるとともに、それまで中国詩の古典という枠組みを崩す目的があったことも考えると、少なくともテキストおよび措定の双方が新しかったと言えるだろう。

参考文献

- 岩波文庫編集部（1997）『岩波文庫解説総目録〈下〉』岩波文庫
- 遠藤紹徳、武吉次郎（1990）『新編・東方中国語講座 第4巻【翻訳篇】』東方書店
- 小野勝年〔訳註〕、張彦遠〔撰〕（1938）『歴代名画記』岩波書店
- 加島祥造（1992）『翻訳再入門 エッセイと対談』南雲堂
- （1994）「漢詩和訳考」『近代日本の翻訳文化』（亀井俊介〔編〕）中央公論社
- 桑原武夫（1982）「吉川幸次郎と欲望肯定」『吉川幸次郎』（桑原武夫〔ほか編〕）筑摩書房
- 古田島洋介（1997）「漢文訓読の〈割引率〉——記憶術としての定位——」『明星大学研究紀要【日本文化学部・言語文化学科】第5号』明星大学青梅校舎
- （1998）「『漢文訓読＝記憶術』論 再検証」『明星大学研究紀要【日本文化学部・言語文化学科】第6号』明星大学青梅校舎
- （1999）「『漢文訓読＝欠陥翻訳』論への反論」『明星大学研究紀要【日本文化学部・言語文化学科】第7号』明星大学青梅校舎
- （2000）「現代における漢文訓読の意義」『明星大学研究紀要【日本文化学部・言語文化学科】第8号』明星大学青梅校舎
- 竹内実（1982）「吉川幸次郎先生を哭す」『吉川幸次郎』（桑原武夫〔ほか編〕）筑摩書房
- 澤野久雄（1982）「杜甫の隣人」『吉川幸次郎』（桑原武夫〔ほか編〕）筑摩書房
- 武部利男（1982）「漢詩の翻訳おぼえがき」『翻訳』岩波書店
- 張明澄（1967）『誤訳・愚訳（漢文の読めない漢学者たち！）』久保書店
- 中野重治（1997a）「翻訳と見学」『定本版 中野重治全集第十巻』筑摩書房
- （1997b）「翻訳の一面——二葉亭のにくらべて——」『定本版 中野重治全集第十六巻』筑摩書房
- （1998a）「漢詩・漢文の翻訳」『定本版 中野重治全集第二十二巻』筑摩書房
- （1998b）「絵の本の翻訳」『定本版 中野重治全集第二十二巻』筑摩書房
- （1998c）「カッコつき「翻訳苦心談」」『定本版 中野重治全集第二十二巻』筑摩書房
- 野村喜和夫（1996）「ベンヤミンのひそみにならって」『現代詩手帖7月号（第39巻・第7号）』思潮社
- 三浦つとむ（1976）『日本語はどういう言語か』講談社
- 山田準、鈴木直治〔訳註〕（1936）『伝習録』岩波書店
- 横山弘〔編〕（1987）「吉川幸次郎 編年著作目録」『決定版 吉川幸次郎全集第二十七巻』筑摩書房
- 吉川幸次郎（1969a）「支那学の問題」『決定版 吉川幸次郎全集第十七巻』筑摩書房
- （1969b）「小野勝年訳「歴代名画記」」『決定版 吉川幸次郎全集第十七巻』筑摩書房
- （1969c）「支那語とその翻訳」『決定版 吉川幸次郎全集第十七巻』筑摩書房
- （1969d）「支那語の翻訳」『決定版 吉川幸次郎全集第十七巻』筑摩書房
- （1969e）「竹内好氏への書簡」『決定版 吉川幸次郎全集第十七巻』筑摩書房
- （1969f）「翻訳の倫理」『決定版 吉川幸次郎全集第十七巻』筑摩書房

- (1969g) 「『唐詩翻訳』について山形直氏に」『決定版 吉川幸次郎全集第十七巻』筑摩書房
- 、大山定一 (1969h) 「洛中書問——大山定一氏と共に——」『決定版 吉川幸次郎全集第十九巻』筑摩書房
- (1969i) 「詩經国風あとがき」『決定版 吉川幸次郎全集第三巻』筑摩書房
- (1969j) 「本居宣長」『決定版 吉川幸次郎全集第十七巻』筑摩書房
- (1970a) 「『尚書正義』訳者の序」『決定版 吉川幸次郎全集第八巻』筑摩書房
- [訳] (1970b) 「尚書正義 卷一」『決定版 吉川幸次郎全集第八巻』筑摩書房
- (1970c) 「第八巻唐篇 I 自跋」『決定版 吉川幸次郎全集第八巻』筑摩書房
- [訳] (1970d) 「胡適『四十自述』」『決定版 吉川幸次郎全集第十六巻』筑摩書房
- [訳] (1970e) 「豊子愷『縁々堂随筆』」『決定版 吉川幸次郎全集第十六巻』筑摩書房
- (1970f) 「私の信条」『決定版 吉川幸次郎全集第二十巻』筑摩書房
- 劉健芝、許寶強、陳順馨 (2000) 「翻訳の政治性とアカウンタビリティ 香港の場合」(中條 献 [訳]) 『別冊思想 No. 918 トレイシーズ 1』岩波書店
- Davidson, Donald (1984) *Inquiries into truth and interpretation*, New York: Oxford University Press.
(野本和幸 [ほか訳] 『真理と解釈』勁草書房、1991)
- (1986) 'A coherence theory of truth and knowledge', in Ernest Lepore [ed.] *Truth and interpretation, perspectives on the philosophy of Donald Davidson*, Oxford; New York: Basil Blackwell. (丹治信春 [訳] 「真理と知識の斉合説」『現代思想 六月号 第十七巻第七号』青土社、1989)